

- (16) (1)に同じ。  
 (17) 『古典俳文学大系 蕉門俳諧集 二』(集英社)二四七頁。  
 (18) 『おくのほそ道』と名所和歌集』(『俳文芸4号』)、後に『芭蕉  
 Ⅱ』(日本文学研究資料叢書)(有精堂)に所収。  
 (19) 京都大学附属図書館蔵の版本によった。  
 (20) 『日本国語大辞典』三卷(小学館)一二頁、ならびに『近世上  
 語辞典』(東京堂)一四八頁、『上方語源辞典』(東京堂)六二頁。  
 (21) 『俳書大系 貞門俳諧集 下巻』(春秋社)五三五頁。  
 (22) 『定本西鶴全集』第十三卷(中央公論社)二四一頁。  
 (23) (14)に同じ。

(こばやし・とおる 本学大学院博士課程)

## 中野重治の啄木論

### はじめに

中野重治が啄木について書いた文章の中に『日本問題としての啄木』<sup>(1)</sup>というものがある。短い文章だが中野が啄木に何を見ていたかを表した簡潔な一文である。中野はここで述べている。

日本問題は日本人が引きうけるほかはない。啄木は、自分以外の誰かにも何かにも頼まないで自分で問題を引きうけてそれをどうにかしようとした。それが彼の文学だった。かりに日本の後れということを持ちだすとすると、啄木は他の何かによってこれをあざ笑わないでその後れそのものに立ってその処理、解決、発展を考えた。そしてその考えを自分の手あしを働かしていくらかでも実現しようとした。そこを私は「尊い」という言葉で思うこともある。

中野は、いわゆる啄木の「研究者」ではないが、大正末期に執筆された『啄木に関する断片』をはじめとする彼の啄木についての発言が啄木の研究史の中で占める位置は小さくない。とくに

### 田 口 道 昭

『啄木に関する断片』とそれに続いて書かれた『啄木について』は、その後の啄木の研究史に与えた影響の深さの点で避けて通ることができないものとなっている。

ところで、中野の啄木論はしばしばこの二論文だけが取り上げられ、プロレタリア文学ないしは左翼陣営の代表的な啄木論であり、歴史的な制約を持ったものとして論じられる。しかし、はたしてそれだけであろうか。中野の啄木論を裁断した側に欠落部分はなかったか。中野が「見落とす」とは逆の方向で「研究者」は見落としていないか。これが本稿の問題意識の発端である。そしてそれは冒頭に掲げた一文にもかかわってくる。中野は戦後、自説を訂正し、発展させている。いまその中心点をまとめておくと、啄木と「日本問題」ないしは国家の問題であり、また、啄木の「弱さ」をどうみるかという問題である。そしてそれらは啄木の全体像にかかわる問題なのである。

本稿の目的は、それらの課題を中心に戦前・戦後中野の啄木論が提起したものをあらためて見直すことである。

戦前の中野の啄木論については既に啄木の研究史を扱った論文の中で多々触れられているので、ここで贅言を尽くすことはしない。本稿で問題とする部分についてのみ整理しておきたい。

中野は「啄木に関する断片」の中で、「時代閉塞の現状」の中の一節「我々は今最も厳密に、大胆に、自由に『今日』を研究して、其処に我々自身にとっての『明日』の必要を発見しなければならぬ、必要は最も確実なる理想である」を解釈して、「必要」を（歴史的）「必然」とみなした。また、啄木の到達した思想がアナキズムでもなく、社会主義を止めたものでも卒業したものでもないとして、晩年の啄木が「社会主義的帝国主義」という言葉を使ったことから社会主義を放棄したと金田一京助が述べたのを批判している。そして、これらの「曲解者ども」が出て来るのは、「ひとえに彼の詩と短歌とのみを見たため」であるとしている。

中野は啄木を社会主義の文学者の先駆としてその思想的側面を高く評価したのであった。

ところが中野は「啄木について」（一九三六年）のなかで、この「社会主義的帝国主義」という言葉の解釈を「科学的社會主義にごく近いものだったろうとは思わなければならない、しかし最後に彼がそこから離れて行ったということももちろん考えられるわけである。」と自説を訂正している。ところがあまり注目されていないが、この『啄木について』の前にも中野はこの問題について触れ

ている。

彼は最後に国家主義に行きついたといふ人もある。さうでないといふ私は考えたことがあるがしかし実際にはさうした事実があつたかも知れぬ。断じてなかつたと我々が今日断定することが出来ぬ。しかし仮りにさうであつたとすれば、我々は

啄木のその点を学ばぬだけである。(『ハイネと啄木』一九三二年) もし啄木がこの国家主義に「転落」していたとして、そういう点を見ないでその残りの部分だけを切り取って「学ぶ」というのはどういふことだろう。こういう論法は、この「国家」の問題だけではない。再び『啄木について』をみてみると、「啄木を愛する」ということは、啄木にあって発展するモメントを受けつぐことであつて、啄木の弱点や誤りまでもそっくり受けつぐことではない」と述べ、それは思想だけでなく文学についても言えるとして「弱々しく、一貫して受動的だった」詩人啄木を「積極的な」思想家啄木と切り離そうとするのである。

思想家啄木の積極面を評価し、そこに中野自身の文学者としての理想を見いだそうとしたこと、一方で啄木の「弱さ」の問題について等閑視し、啄木と国家の問題の追及についても徹底していなかったこと（逆説的であるが）が戦前の中野の啄木論の問題点である。

## 二

ここで、戦前の中野の啄木論を批判したものととして国崎望久太

郎氏の仕事を見ないわけにはいかな<sup>(2)</sup>。

中野が「必要は最も確実なる理想である」の「必要」を「必然」の意味に読み替えたことの誤りは、戦後国崎氏によってはじめて指摘された。また、中野が啄木の思想的到達に「曲解者ども」が生じたのは「ひとえに彼の詩と短歌とのみを見たため」ということをひとつの理由にしていること、それは先にも触れた一文「啄木を愛する」ということは、啄木においてあった発展するモメントを受けつぐことであつて、啄木の弱点や誤りまでもそっくり受けつぐことではない」という主張につながっていくのであるが、そこに国崎氏は、社会主義を志向する啄木と抒情的感傷的詩人としての啄木という二つの啄木像に分裂させた契機を発見し、啄木像を統一することを提唱したのであった。

国崎望久太郎の発言は、中野の『啄木に関する断片』を嚆矢とした、啄木をプロレタリア文学の先駆者とみなし積極的人間像として受け取った従来の啄木研究の主流にたいする重要な問題提起となった。

しかし、啄木の言う「必要」が中野のいうような歴史的「必然」ではないことは、今日から見れば明らかたとしても、国崎氏がそこから「必要」とは彼の内的な要求、主体が主体として自己を確立するために祈求されたものであった」と結論付けるとき、新たに問題が生じる。もう少し詳しく国崎氏の述べるところを見てみよう。

啄木の「必要」は、われわれが能動的に働きかける対象で

ある現実の歴史的過程における客観的必然性ではありえない。彼自身の人間的諸要求の声に耳を傾けること、内奥から囁きかける自我の全面的解放の要求にこたえること、あるいは喪失せんとする実存の抗議にしたごとくこと、こういう内面的、したがって主体的真実こそ、「必要」という言葉に包括された意味であつた。

ここから氏特有の実存主義的啄木像が導き出される。今井泰子氏は国崎氏の『啄木論序説』を評して「周到な論理をもって独自の啄木像を打ち出し、啄木研究史において、いわゆる積極的啄木像の呪縛を払掃する役割を果たした」と述べる一方、「しかしその結果おそらく国崎氏自身が意図してはいなかった作用をその後の研究におよぼした」として、「破壊的人間としての啄木像を必要なまでに強調する発言を促し」たことや「啄木内部における二面的矛盾を固定的に理解する態度を生み出し」たこと、あるいは「全体的な人間像の把握を断念して部分的探索に埋没した」ことなどの弊害について言及していた。だが、それは国崎氏以降の研究者の責任だけだろうか。国崎氏自身の論理に誤りはなかったと言えるだろうか。また、そこに誤りがあるとしたら、中野の啄木論の誤りはどのように克服されるべきだったか。

国崎氏は啄木の思想について次のように言う。

彼の思想は、つねに彼の主体的な情感に滲透されたものであつた。啄木の思想の摂取は、思想に主体をおいてその論理

の展開によって、自己の生活を規律しようとする態度とは、  
 對極に立つものであった。(中略) 生活的要求に即して、生活  
 主体の主体的必要によって、思想は取捨された。

そして国崎氏は、啄木の思想は本来「自己主張」の要求であり、  
 個人主義確立の衝動であり主体自体に密着しているものであると  
 して「思想の相対的独立性への認識がない」という。しかし思想  
 が啄木の主体なり身体から切り離されてはいないことは、むしろ  
 その思想にとつては強みではないだろうか。が、確かに啄木の思  
 想にしばしば動揺と受け取られる点があること、生活実感と思想  
 との間に生まれた齟齬をいかに統一するかということに悩んだの  
 も事実である。それをどのように理解するか。

この思想と主体の問題についてはもう少し突っ込んで考えてみ  
 る必要がある。

国崎氏は中野の『啄木に関する断片』にはじまる従来の啄木像  
 がその「積極面」のみを見て、啄木の暗部というべき側面を見な  
 かったことを批判する。国崎氏は「鋭い社会批判の背後には、そ  
 れとおそろしく異質な暗鬱な心情が絶えず啄木をさいなんしてい  
 た」という。しかしそれではその「暗鬱な心情」が、あるいは  
 「空虚の感」がどのような理由によってもたらされたものなのか  
 は十分に説明されていない。私はこれを「実存主義的人間」とい  
 う言葉で片付けようとするには賛成できない。

国崎氏は実存主義的啄木像の原型を明治四十一年の評論『卓上  
 一枝』にみている。啄木はこの評論で自然主義に対する自己の立

脚地点を定めようとしている。一切の生活幻像を剝奪したとき残  
 るものは「どうにか成る」という言葉であり、虚無感である。啄  
 木はそれに対して自己拡張と自我融合との一元両面観という哲学  
 を対置しようとするが、その哲学さえ「幻像」ではないかと疑わ  
 ざるをえない。国崎氏はこの「自然主義的に把握された」あるが  
 まま」の人間へのかぎりない不安、虚無の深淵への恐怖におび  
 え」る啄木に「実存主義的人間認識の萌芽」を読み取る。かつて  
 窪川鶴次郎氏はこの『卓上一枝』を以て啄木の社会主義思想の  
 「萌芽」と理解した。啄木がこの時点で自然主義に対して違和感  
 をもっていたことやその後の啄木の足取りから窪川氏はそう理解  
 した。しかしその理解が性急なものであったことは否めない。が、  
 国崎氏のようにここで啄木が表明した不安と虚無感をその後の啄  
 木の理解にまで及ぼしていくことにも問題は残る。

明治四二年の秋頃には『食ふべき詩』や『きれぎれに心に浮か  
 んだ感じと回想』に見られるような生活態度の改善を基礎とした  
 啄木の思想転換が見られる。それは翌年の『時代閉塞の現状』に  
 つながって行くわけであるが、なおも啄木には実存主義への志向  
 がみられるとして国崎氏は、『硝子窓』(明治四十三年六月)や『田  
 園の思慕』(明治四十三年十一月)の一節をも取り上げる。「安楽  
 (ウェールビイング)を要求するのは人間の権利である」という言  
 葉は「人間の生活の社会保証」の意ではなく「魂の安楽への切実  
 な要請」であり、「実存心情の切実な要請」とされる。

そして『時代閉塞の現状』についていえばこれがアナーキズム

の論理による国家強権批判であると見なし、その論理を支える  
 主体側に「強烈な個人主義思想」を見るのである。啄木の「必要  
 概念を「内面的・主体的真実」とみなした所以である。したがっ  
 て『時代閉塞の現状』には理論としての不備もあることを国崎氏  
 は指摘する。それは「個人主義の、しかも労働者階級と結合する  
 現実的手段・方法をもたない急進的知識人の個人主義的解放の未  
 来図にとどま」っていることであり、天皇制の問題や「家」の問  
 題を回避したことであると氏は述べている。啄木の国家強権批  
 判はこれらの問題を回避することによってラジカルでありえたと  
 評価されるのである。そして表向きのラジカリズムは、「弱い主  
 体」と裏腹のものとして把握される。概念の抽象性は、概念にな  
 らない次元の情感を背景として持っている、あるいは圧殺してい  
 るということになるか。だから生活や社会についての合理主義  
 的な追及が破綻したとき啄木の実存主義的心情が具現することに  
 なる。

啄木が強烈な自我の持ち主であり、晩年の社会主義思想への志  
 向も彼の主体性に支えられたものであることは否定できない。し  
 かしそのことを理由に啄木の思想が「観念的ラジカリズム」のも  
 の、あるいは実存主義者のものと一律に規定してしまうことは、  
 啄木が現実と思想、主体もしくは生活感情と思想との間の矛盾を  
 いかに統一しようとしていたのかということを見逃すことになる  
 ではないか。

国崎氏の啄木論は、戦前からの「積極的人間像」としての啄木

をその消極面とを統一させて論じる必要を説きながら、実際には  
 啄木の「弱さ」や「誤り」を強調し「実存主義的啄木像」に収斂  
 させていったかのような印象を受ける。

それでは、この啄木像の問題に対して戦後の中野重治はどのよ  
 うに答えようとしたか。これは先に指摘した戦前の中野の啄木論  
 の弱点に対して中野がどう訂正していったかということでもある。

### 三

戦後の中野は日本という現実に対する啄木、という像を提示  
 する。そこには日本という現実をどうしていくのか、その立場か  
 ら啄木をどのように読んでいくのか、という発想が貫かれている。  
 それが所謂コスモポリタンの発想とは異なった立場からなされ  
 ていることに注目したい。本稿の冒頭に挙げたものもそのひとつ  
 であるが、その原型は戦後すぐの時期からのものである。一九四  
 八年に執筆された『啄木と「近代」』にも「われわれは、あの当  
 時啄木が、『明日』の考察に書いたところを十分に読み、ほんと  
 うにわれわれ自身、こんにちの日本人の生活問題、こんにちの日  
 本文学の問題を考えなければならぬとこう思います。」と書いて  
 いる。そしてこの発想は啄木がその当時日本と日本人の問題ある  
 いは国家の問題をどのように考えたのかということへの追及につ  
 ながっていく。

伊藤博文の死に対する啄木の哀悼の文章(『百回通信』明治四十二  
 年十一月)について中野が言及したのもこの時期であった(『啄

木研究のひろがりについて」一九四九年。

啄木は伊藤の死に際し、「新日本の規模は実に公の真情によりて形作られたり。吾人は『穩和なる進歩主義』と称せらるる公の一生に深大の意義を発見す。然り、而して吾人の哀悼は愈々深し」と書き、哀悼歌五首まで添えたのであった。これに対し中野は「啄木が日本の将来に関して描いていた図面のなかには、伊藤博文が日本の将来に関して描いていた図面と衝突するものもあつたけれども、また一致する点も相当あつた。」と述べ、「たんに今とは違うというように眺めるだけでなく、当時は啄木すらが、こういう歌（伊藤哀悼歌—引用者）を自分の胸から書かずにはいられたなかつた事情にたいする根本的な研究ができ、啄木にたいする大きな同情と結びついた正しい批判ができるようになる」の必要について説いている。以前のように一面的に撰取するところ、しないところというような腑分けをする態度から抜け出しはじめている。

中野のこの発言は石母田正に啄木におけるナショナルなもの究明を深めさせるきっかけともなつた（啄木についての補遺）。

また、一九五二年には次のような文章がある。

こういう（啄木の引用者）悲しみを、われわれが、こんにちの日本の実情に即して真剣に扱っているかどうか。もしわれわれが、能うかぎり国際的な立場に立つて、しかし自分の問題としては直接日本の問題に面し、日本問題解決のための力が日本人のなかに蓄積されているという事実を明らかに認めるのでなければ、どれだけ新しい知識を持ち、どれだけ

新しい場面を歌つたにしても、問題の真の解決は結局のところたぐりよせられず、それあつてはじめて予想される作柄の大ききということも生まれてこないのではないか。

（『啄木の日をむかえて』）

中野が『日本問題としての啄木』という表題で啄木について書かざるを得なかつたのも同じモチーフによる。

そしてそれは、啄木が日本問題の解決を「自分の手あしを働かしていくらかでも実現しようとした」のに対し、現在の自分たちが啄木ほどに日本問題に対し相対しているか、という強烈な問題意識となつて示される。

いまここで中野の啄木に対する「畏敬の念」というものを整理すれば、啄木は日本という現実をどうみるか、どうしていくか、それを真剣に考えて自分のものとして背負おうとしていた、というところにある。戦後の中野の啄木論が単純に「論者自身の政治観社会観を尺度として対象作家の政治姿勢を計」る態度（今井泰子氏）とは異なる姿勢を見せていることに注目したい。中野は「問題を進歩的に扱おうとして、啄木では、自分の気に入る社会主義のところだけ切りとってきて、これこそ、これだけが、真の啄木だといって振りまわすやり方」（『京都から』一九五四年）を批判している。したがって、従来の啄木像を批判しようとした国崎氏が、啄木の『時代閉塞の現状』が無政府主義の論理からすれば当然の論理だったと言ひ、階級闘争や労働運動の意義が評価されないというとき、国崎氏は中野がここで指摘した弊と同じ誤りを

逆の立場から犯していると言えるのではないか。

中野は、啄木に先駆的な国家論を読み取る態度（あるいは国家意識の誤りを切り捨てる態度）から、啄木の日本の現実（その中に国家の問題は含まれる）に対する姿勢に焦点を当ててそこに啄木の意識を見いだそうとしている。

それは啄木の現実に対する態度は国崎氏の言うような「観念的」なものであつたかどうか。論点を啄木の主体をどうみるかというに移したい。

#### 四

国崎氏は「さまざまな思想傾向にたいする敏感な反応は、彼の主体の弱さに関係していたかも知れない」と述べている。また国崎氏の言う啄木の主体的「弱さ」は彼の理論の「理想」性、ラジカリズムと表裏のものであつた。が、中野はこれとは正反対の見解である。中野はむしろ啄木が模倣はするがそれを自分のものとして消化していった点、既成のものにおんぶせずに「自分の敷いたレールそのものにも」「絶えず疑問を出している」点を見ている。その根底には啄木の対象が日本と日本人の現実であつたこと、啄木の動揺の原因もこの現実の複雑さにみなければならぬということがある。そのことに関連するが、中野は早くから啄木の記事、文体ということに注目している。啄木の「若い晩年」の時期、二四才ぐらいからの文章について、中野は「正確な論理、現実主義、そこから来る冷静で落ちついた表現を高く尊重したい」（『石川啄

木について』一九六八年）と述べているが、これを啄木の思想とのかかわりで論じている。先にも見てきたように戦後の中野が啄木に見いだしたものはむしろこの啄木の現実主義にかかわってくる。啄木がしばしば動揺を来しているように見えるのは、無政府主義についてもその変革の手段についても、それとナショナルリズムとの結合の問題にしても前人未踏の領域に属するところに彼が入つていかざるを得なかつた点に求めねばなるまい。「観念」で「現実」を裁断するのではなく、「現実」から「観念」をみつけたというとした点、啄木がしばしば「日本人の性格」について観察し、言及し（階級的視点が無いなどというまい）、それを日本の現状変革に結びつけようとした点、幸徳秋水の獄中からの手紙を写し終え、「編輯者の現在無政府主義に関して有する知識は頗る貧弱である」と書き、なおも社会主義の研究を続けようとする意志を持つていたこと（A LETTER FROM PRISON）明治四十五年五月稿）など、これらは借り物の「思想」で「現実」を裁断していい気になつている態度とは別物である。そしてそこに主体の「弱さ」をみることは出来ない。

この現実をみつめなおす作業が啄木の生活態度にまで及ぶものであつたことは、「食ふべき詩」はもとより北原白秋をはじめ多くの証言がある。

だが啄木の思想に急進性を見る国崎氏は、このラジカリズムは敗退の後、容易に現実順応主義に転化するものとみなす。国崎氏は啄木の最晩年に理想と現実との相克の後、「あるがまゝの現実

の肯定の中に、人間実存の暗い愚かしい絶望の声をきく」と結論付けた。また今井泰子氏は、明治四十三年末以降の啄木に「現実には堪えるという諦め」を見る。これに対する反論には石井勉次郎氏の詳細な研究があるので、特に私が付け加えるものはないが、ここでは今井氏の次の言葉に限ってみておきたい。

啄木の生涯を顧みるなら、行動、生活態度、思想は到底分離しがたい。行為の伴わぬ思想は啄木においてはもはや思想ではない。というよりも、行為を伴わぬ実情であれば、実情に即して新たな思想を模索する、それが啄木なのである。つまり思想は変化したのだ。

その新たな思想とは今井氏によれば、諦観であり忍従ということになる。啄木があつては思想は主体によって規定されるという考え方において、今井氏の解釈は国崎氏を踏襲している。そしてこの考え方は氏の『悲しき玩具』『呼子と口笛』の解釈につながっていく。いまひとつの例を示すなら、次の歌の解釈、庭のそとを白き犬ゆけり

ふりむきて、

犬を飼はむと妻にはかれる。

『悲しき玩具』を締めくくるこの最後の一首について国崎氏は「一切の現実との和解」を見、今井氏は、啄木における犬のイメージが「生活者啄木の分身」であることを説明し、この歌が「平和な家庭生活、安らかな日常生活を願望する歌」であることに加えて、「死身に身を移しつつある者」の「この世への断ちがたい

愛惜の歌」と解釈する。しかしこの歌（この歌だけでなく）をもつて啄木が現実と和解したとは決して言えない。「平和な家庭生活、安らかな日常生活を願望」しながらも、「現在の家庭制度、階級制度、資本制度、知識売買制度の犠牲」（『歌のいるいる』明治四十三年十二月）であると自分を認識せざるを得なかつた啄木である。また最晩年に「俺はもう書く事なんか止そう、俺の頭にある考へはみんな書く事の出来ない考へばかりだ。書いて書けない事はないが、書いたって発表する事が出来ない。」そう思わずつぶやく自分をみつめざるを得なかつた啄木である（『平信』明治四十四年十一月稿）。

国崎氏や今井氏の主張とは逆に、啄木の思想は主体から「独立」し、「主体」をみつめるものとしてある。その思想を具体化することの出来ない現状に主体は「弱さ」を吐露するのである。それと思想の変化とは別のものである。また「思想」は主体の「弱さ」を糊塗するものでもなかつた。

中野重治の啄木論にかえらう。中野は啄木のこの「弱さ」ということをどうみたか。啄木の「弱さ」への理解は啄木の詩歌への理解にかかわってくることに今も見たとおりである。戦前の中野は啄木の弱点や誤りは受け継がないだけで、と言っていた。また、「詩歌のうちに痕跡を残せるその観念的虚無主義とナロードニキツム」と呼び、「ほとんどすべての作品を色どるものが一貫して諦め、投げやり、やけくそ、ある種の自嘲」と規定していた。しかし戦後になってこの考えの一面性を認識し、むしろこの「弱

さ」自体を考察することを提唱している。

『京都から』では、「啄木の明るい面も暗い面も統一して味わって、そのことできつそう啄木の真の姿を知る」こと、「啄木の強さと明るさは、かえってその弱さと暗さとの上に立っていた」ことを知る必要があると述べている。そうして「かえってそこ（弱さ）の面―引用者）から、それを客体として、自分から引きはなしてそれに姿をあたえることのできた作家啄木の強さがうかがわれる。この日本人自身のなげない状態、貧しき、貧から来た鈍、低き、おろかさを受けとめ得たところ、それが彼の思想上の発展の土台となつている」と述べている。

一九六八年の『石川啄木について』では若干調子を落として、「短歌、詩、散文の全体をとおして、非常に冷静なもの、きわめて強健なもの、また時に強い爆発的なものを見せているけれども、しかもやはり気の弱り、ふかい、長くつづく悲しみ、また疲労困憊の模様が全体としては見られると思う。そして私は、啄木その人を理解するには、この疲労困憊、この悲しみの情、この心の弱りを十分に見なければならぬと思う」と書いている。

同時に、「啄木と非常に遠くちがった条件のもとにいて、啄木に上べで似たようなデスプレートな気持ちになるのが啄木のほんとの理解と思いこむことも（強い）面だけを見て啄木の本当の姿と考えるのと引用者）同様に理性的でないと思う」と当時の啄木の暗部を強調しようとする傾向に対して釘をさしていることにも注目したい。

『京都から』（一九五四年）から『石川啄木について』（一九六八年）までの間に啄木の思想を再検討したものに国崎氏の『啄木論序説』や高桑純夫の『石川啄木―爪先で立つヒューマニスト』、秋山清の『啄木私論―アナキズム・ナシヨナリズム・ニヒリズム』<sup>11)</sup>があつた。また生活破綻者としての啄木を強調するものに宮崎郁雨の『函館の砂々啄木の歌と私と』（一九六〇年）があり、これらの「成果」を評伝としてまとめたものに杉森久英の『啄木の悲しき生涯』（一九六五年）がある。これらは従来の啄木像に疑問を投げ掛け、啄木の思想と主体の問題に再考を迫るものであつたが、いずれも啄木の暗部を強調する弊に陥っていた感がある。

石井勉次郎氏が指摘しているように、<sup>12)</sup>中野は啄木に「悲しみ」や「心の弱り」を見てもそれを「思想の変化」ととらえたり、「ニヒリズム」といった概念でおさえることをしなかつた。

中野は『大硯君足下』（明治四十四年一月稿）という文章に触れて「啄木の悲しみ」について述べている。

啄木の悲しみは、彼の眼前で或るプロセスが現実に進みつつあつたそのときに、それとは別なプロセスの可能を彼自身思い描いていたということではなければならない。しかしそれが実現されないことをあまりに明らかに見せつけられていたからのものにちがいない。<sup>13)</sup>

啄木の「弱さ」は現実を見据え、またその現実生きる自己をみつめたものの「強さ」の半面である。短歌についても、それが啄木にとって現実批判の武器でないとしても、それを国崎氏のよ

うに「現実からの回避や逃避としての回想が主導的な力になって、彼の発想をひらいていった」と見なすことは、この「弱さ」の半面を見逃すことになると言えるのではないか。そうした「強さ」を啄木が最晩年にまで持ち続けたことは、先に引用した啄木の言葉を含む『平信』一編にもあきらかであろう。

啄木の思想と主体を問うとき、啄木の「強さ」と「弱さ」、またその「強さ」の一面である現実主義について戦後の中野が論じた啄木像をもう一度振り返ってみる必要があるのではないか。

最後に、中野が啄木に見ていたものを別の角度から見てみたい。中野は啄木短歌の継承の問題にふれて、プロレタリア短歌運動、口語歌運動のいずれも「いまだ必ずしも啄木を越えていない」と言う。もちろん芸術の継承はそれほど単純なものではないことを認めつつ、なお次のように言う。

われわれには、いろんな条件のもとではあったが、最後のものを啄木ほどには自分の手で探さなかつた傾きがある。

ある既成のものに初手から負ぶさつた傾きがある。自分で自分をあざむいたというのではないが、結果から冷酷に見れば、そんなことになり兼ねぬようなところまで行って難問を安易に解決しようとした点がある。そこに啄木に及ばぬ点があるように思う。

これは中野自身の啄木論の反省であり、中野の文学の反省でもあろう。

創作活動についてのみ言うのではない。中野は啄木研究の現状についても「ずいぶん細かくなってきているながら、その割りに、寄つてたかつて一つ穴をせせてはいないか」と述べ、そうして「しかしそこでどう啄木を継ぐのか。どうこれを発展させるのか」という問題意識を提示している。

いま中野のこのような言葉を振り返るとき、戦後の中野の啄木論が「一面性や政治的性急さ」（今井氏）から離れて、より内在的に啄木を理解することの意味を問いかけていることに気付く。またそれは論者の主体を問うことと別ではない。ここに、中野の啄木論が単なる「文学的感動の領域」を越えて依然として問いかけてくるものがあるのではないかと思う。

(1) 一九六七年五月発行『啄木全集』（筑摩書房）内容見本。

(2) 國崎望久太郎『啄木論序説』一九六〇年五月 法律文化社。

(3) 今井泰子『石川啄木論』一九七四年 塙書房。

(4) いま一例を示すと、啄木は「明治四十四年当用日記補遺」に明治四十三年の出来事として「思想上に於ては重大なる年なりき。予はこの年に於て予の性格、趣味、傾向を統一すべし、一鎖鑰を発見したり。社会主義問題これなり。」と書き付けている。國崎氏はこの「性格、趣味、傾向」という言葉をとらえて、啄木にとって生きるうえで「思想」（いわゆる主体から独立した）は第二次的な意味しかも得なかつた、社会主義も主体側からの「必要」としてのみ論じられているというのである。そしてこの主体側ということを実存主義として解釈している。

しかし、そもそも主体性を欠いた思想に「思想」としての資格があるのかまず疑問であるが、それは言わないとしてもここで啄木が

「性格、趣味、傾向を統一すべし」くその結び目を発見したことは、明治四十二年以来、「生活の統一」と「自己の徹底」を求めて来たことのひとつの帰結であり、自己と現実との関係を切り放さないで、両者の関係の合理的把握の一貫性を求めたものであって、主体側から現実を一方的に裁断しようとしたものではないことを思い起こす必要があるのではないか。

(5) 窪川鶴次郎『石川啄木』要書房 一九五四年四月。

(6) 石母田正『統歴史と民族の発見』（一九五三年 東京大学出版会）。ただし中野自身は厳密な定義でもってナショナルなもの究明はしていない。インターナショナルイズムについての言及は、『啄木のふれたアジア・アフリカと今日のアジア・アフリカ』（一九六一年）、『石川啄木について』（一九六八年）。

(7) 同じように、ひとつのまとまった体系というものを「思想」の優劣の判断にすることは啄木の真の姿を見誤ることになる。國崎氏は啄木の思想が主体によって規定されるものであることをもって「体系」づけられたものではないと評価する。一方、中野重治はその点については次のように書いている。

啄木は大きく成功したということはできぬかも知れない。何かを編みだす、何かを体系づける、まちがいなしという日本改造の大綱を仕上げて示すところへは啄木は行くことができなかった。彼自身苦悶して、苦悶のうちに仆れたのだったから。そしてそこに彼の大きな意味があつたし、ある。それが多数者にアピールしたし、アピールする。この啄木の姿は開拓者の姿に似てい

る。

(8) 相馬庸郎氏もまた『時代閉塞の現状』などに触れて理論の積極性が生活の実感を切り捨ててしまっている、と述べている。（『啄木の「実行と芸術』』啄木研究』一九八〇年十月 洋々社）。

(9) 啄木くらゐる嘘をつく人もなかつた。然し、その嘘も彼の天才らしい誇大な精気から多くは生まれてきた。（中略）そうした彼がその死ぬ二三前より嘘をつかなくなつた。真実になつた。歌となつた。おそろしいことである。（北原白秋『啄木のこと』一九二六年）。

(10) 石井勉次郎『私伝石川啄木 終章』（一九八四年五月 和泉書院）。

(11) また、『日本近代文学大系』の中で今井泰子氏は、國崎氏の「必要」の語の理解（前述）を重要な指摘である、と述べたうえで啄木の思想について次のような解釈をしている。

啄木にとって思想とは、自己の外に客観的にその普遍性が証明されていたとしても思想ではなかつたのである。「必要」の語は、啄木が「思想」をそのように扱い、自己の思想をそのように形成しつづけてきたこと、彼のものもろの体験なしに彼の思想が存在しなかつたことを語っている。

啄木の体験が彼の思想形成に与えた影響については承認できる。しかしこの文の前半部分については、承認できない。

(12) このような思想と主体との関係を私は明治四十三年三月ごろからのもものとみる。啄木は宮崎郁雨に「我等の人生は、今日最早到底統一することの出来ない程複雑な、支離滅裂なものになつてゐる」と、そしてそれは「実行者としての僕の為には、致命傷の一つでなければならなかつた」と述べ、もはや「自分自身意識しての二重生活」を営むより外に、「この世に生きる途はない」と手紙に書いて

いる。これ以後大逆事件が起こり啄木の思想はさらに新たな展開を迎えることになる。これ以前と以後とは同じように概括することを許さないものを持っていると思う。

(13) 高桑氏の問題意識は「啄木の社会主義ヒューマニズムは、個人的主体の血肉によって媒介されない、みずみずしさの欠けた、技巧にすぎなかつたのである。」というところにある。これは国崎氏の主張を別の側面から述べたものであるといえる（『日本のヒューマニスト』一九五七年五月 英宝社）。

(14) 『文学』一九六二年六月・八月。また、秋山清氏の批判には、石井勉次郎氏「啄木評価の動向について——主として秋山清『啄木私論』批判」（『大阪交通短期大学紀要』一九六四年一月、改稿『私伝石川啄木——詩神彷徨』一九七二年 桜楓社）がある。

(15) 中山和子「啄木と後代」（『国文学 解釈と鑑賞』一九八五年二月号）。

※中野重治の文章は、筑摩書房『中野重治全集』第一六卷（一九七七年）による。

（たぐち・みちあき 本学大学院博士課程）

## 抵抗としての文学

——福永武彦論（一）——

### 序

芸術作品やその表現をめぐって織り成される世界を抵抗という観点からとらえなおそうとすると、われわれは、疎外された生の中でその疎外状況に抗する人間の営為としてほかならぬ芸術の世界を分け持っているのだと考えることによって、自らの何ゆえとも知らぬ衝動に形を与えようとしているのである。そこで抵抗は、われわれの衝動に導かれ享受者が作品と取り結ぶ関係のうちに表れる道と、作者が創造行為によって作品に封じ込めていったものの中に表される道との交点に、二重性をもってとらえられるべきならぬだろう。なぜなら、その時代の現実に対する作者の態度の本質は、創造の行為を貫き、創造の過程を経て、転化された形で作品に表されるよりほかどのような道を迎えることもできず、同様に享受すべき作品との間にわれわれが持つことができる関係も、われわれの行為が自らの現実を根を持つかぎり現実に対するわれわれの態度の本質を転化させた形で表さざるをえないか

らである。

こうした考えのうえに立つて眺めると、例えば日本の近代文学の中で抵抗という言葉によりさまざま想起される「プロレタリア文学」などは、政治的な抵抗と非政治的な抵抗とが弁別されない状態の中で芸術作品の政治的価値と芸術的価値との両極の間に評価軸の混乱を招いていたが、それも抵抗を、作者の創造行為を辿って作品へゆく道と、作品に発して享受者の現実へゆく道とに確かめてゆくことでおよそ明らかにしうるものと思われる。ただここでは政治的な抵抗を問題にするつもりはない。あくまでも非政治的な抵抗、「戦後」作品の文学的な抵抗こそが取り上げるに価する問題であると考え、せいぜい文学的な抵抗の現実の有効性という次元でのみ政治性にも触れることがありうるくらいであろう。ともあれ、作品の向こうとこちらとを想定し二重性のもとに抵抗を見ることによって文学作品のある核心に近づきたいと願っている。

芸術が現実に対する抵抗でありうることの本体は、作品から導

川 島 晃